

男性性の変容についての研究
- トランスジェンダーを生きる過程の分析から -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
牛若孝治

本論文は、視覚障害・FTM トランスジェンダーの自己の40年のライフストーリーの中で、特に男性性の矛盾や葛藤を抱き、問題提起しながらも、社会との共生や再統合に焦点を当てた自分史を、自己物語を通してエピソード分析をした当事者研究である。したがって本論文は、男性性の自分史に焦点を当てたエピソードを中心に記述していながらも、そこから社会の普遍的なテーマを見出そうとしている。

そのエピソード記述を目的に、自己物語の記述を試みた。この自己物語の記述の手段として、自己内対話を取り入れた。筆者の言う自己内対話とは、もともと複数存在している自己の在り方を、あえて二人の自己に象徴化させた上で、その二人の自己の対話によって、これまでの自己の、特に男性性エピソードをインタビュー形式で対話し、それを対話分として自ら記述していくことによる自己省察を主目的に編み出した方法である。この記述方法は、単なる自分史の中から、時間軸に沿って男性性を構築していったプロセスを記述するのではなく、それぞれの体験が構造化されていく中で、単なる個人の体験ではなく、社会の普遍的なテーマも含めた「ハイライト化された男らしさ」として記述している。

自己物語の記述によって、対話的自己物語が成立した。その結果、自己の構築してきた男性性の中に、通例であれば気づかない誇張した男性性を浮かび上がらせた。誇張した男性性は、社会によって構築された男性性・自己によって構築した男性性・更に男性性を追求するあまり、誇張せざるを得なかった男性性など、さまざまな性質を持つ男性性の集合体であり、現実の男性性との調和を図ろうとしている作業を通して、自己のゆがんだ男性性が明確になった。

筆者は、このような自己物語の記述を論文の中で引用しながら、今まで構築してきた自己の男性性を見直し、そして、男性たちが自らの感情を吐露しあう社会的必要性を提言している。